

---

# 凸凹トリオの恋愛事情

もじゅな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

凸凹トリオの恋愛事情

### 【Nコード】

N5462BA

### 【作者名】

もじゆな

### 【あらすじ】

元気なサバサバ女子とおっとりマイペース女子とクールな苦勞人男子、通称“凸凹トリオ”のほのほの凸凹系ラブコメ物語。

不定期更新になる確率120%!!

週一で更新できるよう頑張ります…!!

## 豚じゃなくて猿だよ

季節は春。

桜がちょうどピークを迎えており、満開に咲き誇っている。

この時期の学生行事としては新たなスタートとなる時期であろう。勉強や人間関係など、新しくなる環境に緊張する子も少なくはないだろう。

それは彼女も例外ではない。

「じゃあ、行ってきます」

玄関で靴を履き、新品の制服を着た少女が少しづつきらぼくに言い、扉を開けよう立ち上がる。

少女の名前は青井和音<sup>あおいかずね</sup>。

今日から羅門高校に通う新入生である。

高校生になるという実感のせいか、少しづつきらぼくに言った言葉には緊張が隠れており、外見も制服に着られている感が漂っている。

「おい、ちょ、待ってっ！俺まだご飯食い終わってねー！！」

後ろのりビングから、ドダバタという効果音が聞こえるように一人の青年が茶碗片手に動き回っている。

「お兄ちゃんは急ぐ必要ないでしょ？」

「和音待て。あと5分で俺も出れる」

「別に無理して一緒に行こうとしなくても…」

「ふざけるな！！妹の高校デビューに兄が傍にいないくてどうする！！ただでさえ親いねーのに」

「関係ないわシスコン兄貴」

シスコン兄貴と冷たく言われたこの青年は青井浩輔<sup>あおいこうすけ</sup>。

和音の兄であり、先ほど言われた通りシスコン。

二人の両親は仕事の都合で二人が中学の時から海外に住んでおり、そのため二人暮らしが多いために、徐々にシスコン度が増していったのである。

「第一何で一緒に行かなきゃいけないの？高校生の兄妹が並んで登校って恥ずかしい」

「そりゃあ、迷子になったら大変だろ」

「なるか馬鹿。文化祭や受験で何度か行ってるっの」

会話をしている間にいつの間にか玄関に突っ立っている和音のすぐ側まで浩輔は来ていた。

別に方向音痴でもないのに、和音が緊張で迷子になったら…など呟きながら靴を履いている。

（このままじゃ一緒に登校…！！）

どうしても一緒に登校なんて恥ずかしいことを避けたい和音は急いでこの事態を避けるための方法を考える。

元々考えて動くタイプではないので、なかなかいい方法が思い浮かばない。

考えれば考えるほど頭の中が真っ白になっていき、靴紐を結び終えた浩輔が立ち上がった。

（やばいやばい！！こうなりゃ……）

強行突破だ！と作戦が決まり、浩輔の目の前まで行きそのまましゃがむ。

浩輔がどうしたと声をかけようとした瞬間、和音は先ほど結び終えた靴紐を一気に解いていき自分でも訳がわからなくなるくらい足に巻きつけ紐を絡ませた。

「お前何してくれるんじゃないあー!!」

いきなりのことに驚き戸惑いながら浩輔は大声でツツコミを入れる。和音がめちゃくちゃに絡ませたせいで、思うように動けない。紐を解こうと仕方なくしゃがんで地道に紐を解いていく。

「お前きつく巻き過ぎ…。嫌がらせもほどほどにしろって何回言えば……ってあれ?」

和音に文句の一言言おうと顔を上げると、そこには誰も居なかった。和音が居なくなる前までと違う箇所があるとすれば、半開きになった扉だけである。

「……………やられたー!!」

……

「ふう〜…。なんとか逃げれた」

一方和音はというと、家から歩いて10分ぐらいかかる並木道まで来ていた。

浩輔のツツコミを聞き流して家を飛び出し、全速力で走ってきたためそれなりの距離をとることができた。

ここまで来れば大丈夫だろうと自分に言い聞かせ、のんびりと学校

へ向かい始める。

「桜満開だ」。新学期って感じて緊張するわ全く」

並木道真つ直ぐに並んでいる桜の木は見事満開に咲いており、新学期ムード満開でもある風景に和音はまたも緊張し出す。

家を出る前も緊張はしていたが、先ほどの浩輔とのやり取りで一時は緊張を忘れることが出来ていた。

ちなみに昨日入学式を迎えており、中学一緒だった子も何人かは同じクラスにすることが分かっているためそこまで緊張する必要はないのだが、それでも緊張してしまうのは和音が人見知りの激しい性格だからというしかないだろう。

（話したことのある子が何人か同じクラスにいるのに……。それにあの二人だって）

自身の緊張を取り除こうと必死に昨日のことを思い出し自分を安心させようとするが、周囲に誰もいないことに心細く感じたのか、安心どころかどんどんマイナスな考えになっていき、それに伴うように考える内容も逸れていく。

当の本人はそんなことを気づく余裕もなく、しかめっ面で歩き続ける。

快晴の日に女子高生が一人しかめっ面で桜が綺麗な並木道を歩く姿は、シニール以外なんでもない。

（今日の夕飯はお兄ちゃんの機嫌をとるためのハンバーグにするべきか……。いや、でも最近魚食べてないんだよね……。……ってあれ？）

考えている内容と和音の表情にツッコミたくなるが、それはさておき、和音は前方にいる二人の人物に目を見やる。

二人の人物は男と女で和音と同じ学生服を着ている。その二人は仲睦まじく会話しており、傍から見ればカップルという意見も聞こえそうだった。

和音は二人の人物を確認し、立ち止まり標準を男8女2ぐらい合わせ、全速力で走っていき二人の元に体当たりという名のタックルを繰り返した。

女の方には軽くぶつかるといってコントロールしたが、男の方に対しては容赦なくタックルをかましたため男は前へよろめく。

それでも倒れるというアクションを起こすことがなかったので、和音はチツと舌打ちをした。

「和、お前何してくれるんだ」

「なんだ和ちゃんか。ビックリしたよ」

「おはよう一咲。前に一咲たちいたから驚かそうと思ってね」

「もう、和ちゃんったら相変わらずだね」

「あはははは」

「おい、無視するなメス猿」

「誰がメス豚だって!!」

「和ちゃん、豚じゃなくて猿だよ」

和音の言い間違いに男はため息を吐き、女はニコニコしながら和音の言い間違いを訂正する。

その素振りから、二人ともこのような状況には慣れているようだ。

「そういえば和ちゃん。一咲たちまだ自己紹介されてないよ」

「えっ！本当！？ナレーターさん自己紹介してあげて！」

「お前たち立場を理解し過ぎだ」

ええ…、和音さん直々にお問い合わせされたので二人の紹介をさせてい

たできます。

さつきからニコニコと癒しオーラを発生させるのは須藤一咲。すでいごなき

和音とは中学からの付き合いで親友関係に当たる。

年中無休で発生する癒しオーラは、周囲の人間誰にでも和ませる効果がある。

そして、さつきのツッコミで苦労人なんだろうなと思わせるのは高橋瞬斗。たがはししゅんと

こちら和音とは中学からの知り合いで、一咲とは幼馴染の関係に当たる。

なんだかんだで二人にいろいろ巻き込まれる彼はやはり苦労人と言いきるを得ない。

「どんな紹介文だこれは……」

「和ちゃん、そろそろ学校へ向かわないと」

「そうだね。瞬に気づかれないようにこっそり行こう」

「それいいね、一咲たちスパイみたい」

「悪いが聞こえてるぞ」

えー、という女子からのブーイングを無視し、歩き出す瞬斗を先頭によやく三人は学校へと歩を進める

道中で、和音と瞬斗の口喧嘩をきっかけにいつの間にか鬼ごっこま

……

(……………眠い)



長くてつまらない始業式が終わり、今は教室で担任がホームルームを行っている。

新学期早々なだけあって皆真面目に先生の話を聞いている。これが1週間も経てば賑やかになるんだろうな、と和音は頭の隅で考えながら先生の話しを聞く。といっても内容のほとんどは右から左へと聞き流しているが。

姿勢を崩したいが、席が出席番号順のため苗字が青井である和音は廊下側の一番前の席に座っている。場の空気も固いせいで姿勢を崩そうにも崩せない状態である。

「じゃあ、今日は解散。気をつけて帰れよ」

話しを全くと聞いていいほど聞いていなかったなので、急に言われた解散に少し戸惑いつつも、やっとで解放されると思うと気が楽になりぐだりと机に突っ伏す。

「和ちゃん、帰ろっ」

机を突っ伏してすぐに一咲が声をかけてきた。顔を上げると一咲の他に瞬斗もいる。

この二人とは運のいいことに（瞬斗に至っては微妙だが）同じクラスである。

しかも二人とも一番後ろの席であり、和音は出席番号順では決して座れない席に座れて羨ましいなこの野郎！なんて思っていた。

「眠そうな顔してるな」

「だって眠かったんだもん」

「そんなに眠かったんなら、瞼に目描いて寝てればよかったのに」

「何でそんな恥ずかしいことしなきゃいけないのよ！！」

「二人とも、早く帰ろうよ。トイレ行きたいから帰ろっ」

「学校のトイレ行って来い」

やっぱり？と苦笑いをしている一咲を内心可愛いと思いつながら二人は一咲をトイレへと行かせる。

待っている二人は、一咲があのままではまた喧嘩になるだろうと察知してそれを阻止するための行動とは知ることもなく。

一咲もなんだかんだで苦勞人である。

一咲がトイレから帰ってきて三人はそのまま学校を出る。

横一列で並んでおり、右から瞬斗・一咲・和音である。

中学から何度も一緒に登下校をしている三人にとつてこの順番はベストであり、いつの間にか当たり前の順番となっている。

「そういえば、先生若い人だったよね。新人さんかな？」

「えっ！？若かったけ、あの人」

「一番前の席なのに見てなかったのか？」

「見てたと思うけど、眠気で覚えてないや」

そこそこかつこいい人だったよ、という一咲の声に和音は頭の中で担任の顔を思い出そうとしたが、イマイチ見ていなかったため和音の連想した担任の顔はモザイクがかかっていた。

あの時の自分は襲い掛かってくる睡魔と必死に闘っていたので、どうしてもモザイクを取り除けない。

しかし、まあ別に思い出せなくても問題ないよな、と結果ができれば和音は思い出すのをやめた。別にこれから嫌というほど見るようになるのだから。

「そんなに眠かったの？」

「始業式長くてつままないし。話しもほとんど聞いていない」

「あ、じゃあ和ちゃん明日：「一咲、ストップ」

一咲が言い終わる前に瞬斗が待ったをかける。

「でも、瞬斗…」

「自業自得だ。黙つとこつ」

「楽しんでるでしょ？和ちゃん可哀想」

「和なら大丈夫だ。知っても何もしないだろ」

「え？なんの話し？」

自分だけが知らないということに不満を持ち、二人に問いかける。何故かニヤニヤしている瞬斗を見て、余計に知りたいという気持ちが強まった。

この男にニヤニヤと嫌らしい笑みで見られるとどこか悔しいのだ。

「別に話していいぞ。俺は先に帰る」

そう言つて、少し早歩きで先に歩いてく瞬斗を怪しいと思いつつながら、一咲にもう一度尋ねる。

「で、なんだつたの？」

「明日ね、実力テストあるんだつて。だから勉強しろよつて」「えっ！？実力テスト！！」

それを聞いて和音はようやく先ほどの瞬斗の態度を理解した。

和音は運動神経はいいが、勉強は苦手であり成績もどちらかといえは中の下だ。自分でも頭が悪いのは自覚している。

そんな自分が何も知らずに明日テストを迎えれば、高校生活早々に悲惨な目に遭うのが容易に想像できる。

和音は先に行った瞬斗の方を見やる。まだそこまで距離は開いてい

ない。

急いで瞬斗のとこまで行けば、肩に掛けていた鞆を投げつける。

「痛っ！！お前何してくれるんだよ！！」

「それはこっちの台詞よ！よくも明日のテスト黙っていたな！」

「聞いていない和の自業自得だろ！」

「だからって一咲まで黙らせることないでしょ！」

「冗談だつて通じないのかよ」

「冗談ならもつとマシなのつけや！あんたはいつもいつも……！」

ギヤーギヤーと道の真ん中で喧嘩をしている二人を一咲はニコニコと見守っている。

その様子からこのような喧嘩はそれなりの頻度であるのだと窺える。

「今日も平和だね」

鞆を振り回す和音とそれをかわしながらいまだに挑発している瞬斗を見ながら、一咲は少し嬉しそうに呟いた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5462ba/>

---

凸凹トリオの恋愛事情

2012年1月14日23時52分発行